

日本における夫婦間の性交渉の頻度と親密性の文化的脈絡
Frequencies of Sexual Intercourse and Intimate Relationships among Japanese
Couples: Impacts of Cultural Context

森木美恵 (国際基督教大学)

Yoshie Moriki (International Christian University)

moriki@icu.ac.jp

ヒトの出生は、生物学的要因と文化的要因が複雑に作用した結果生じたものである。本報告では、出生の近接要因のひとつである性交渉の頻度に着目し、日本人夫婦間における性交渉の不活発性についてその文化的脈絡に焦点を当てて議論する。近年、「セックスレス」という言葉とともに日本人夫婦の性交渉の頻度の実態が可視化されてきている。しかし、日本における少子化の仕組みをより包括的に理解するには、性交渉の回数やその不活発要因を分析する従来のアプローチのみならず、出生の過程を詳細に検討し、少子化の仕組みを再生産する社会・文化的背景を詳らかにしていくことが必要である。本報告においては、文化的脈絡として具体的に、子どもとの添い寝と夫婦の親密性のあり方を取り上げる。データとしては、2009年と2013年に実施したフォーカスグループ（前者が男女各24名の計48名、後者が男12名女13名計35名）および2016年に行った半構造インタビュー（3カップル計6名）からの内容を使用する。いずれのデータも報告者によって東京で収集されたものである。なお、夫婦間の性交渉のあり方と出生の関連性を考察するため、再生産期にある日本人夫婦に限定して分析を行った。

日本人夫婦における性交渉の頻度は、Bonggarts(1983)やWood(1994)が示す妊孕力の観点から推測すると、少ないと考えられることが最近の研究より示唆されている。Moriki et al. (2014)の調査によると、妻が20代、30代（結婚1年以上、初婚）の場合でも、週1回以上の性交渉があった割合はそれぞれ29%と19%に過ぎない。子どもを欲しいと思っている回答者についても20代で36%、30代で20%のみが「定期的な」（週1回以上）性交渉を持っていた。また、回答者全体（20歳から59歳）のセックスレス（去年1年間の性交渉の頻度が月1回未満）の割合は45%にのぼり、統計分析の結果から、夫婦の年齢、夫の週60時間以上労働、3歳以下の子ども有り、夫婦間のストレスなどが要因としてプラスに有意に働くことが示されている。性交渉に対して積極的になれない理由として、仕事による疲労、出産後なんとなく、面倒である、などを指摘する報告もある（日本家族計画協会2015）。

日本人夫婦の生活において、(次の)子どもを欲しいとするにも関わらず性交渉が不活発である背景として、結婚し子どもが生まれると、夫婦の単位ではなく子どもを中心とする家族のあり方になるということが挙げられる。子供中心主義の家族形態については従来から指摘されているが、Lebra(1984)は“Filiocentric”と呼んでおり、前述の統計分析の結果、また本報告における質的データの分析結果とも整合性がある。フォーカスグルー

プのテキスト分析では、子どもを中心とした生活のあり方の具体的事例として、「川の字就寝」に象徴される子どもとの添い寝が表出した。添い寝は家族の発展段階のうち一時のみ享受できる幸せな時間であり、部屋数などの物理的制約によって消極的になされているものでは必ずしもなく、夫婦の選択として行われている (Moriki 2017)。しかし、子どもとの添い寝とそこに含まれる親子間の（特に母親との）親密性は、出生につながる夫婦の営みの不活性化や「カップル」としての夫婦関係の希薄化と表裏一体である。さらに、Tahhan (2007)は、日本の川の字就寝について、妻が夫を自身の身体から遠ざけるために子どもを間において距離を取っているケースもあり、結果として夫は家庭から「のけ者」になっていく構図があるとも指摘している。

しかしながら、夫婦の親密性については、性交渉の不活発性と夫婦関係の危機が相関関係にあるとは必ずしも示唆されないことも半構造インタビューの結果が示唆している。それぞれ3歳未満の子どもを持つ夫婦3組からのデータ（夫婦別々に面談）によると、親密であると感じる時間や行動には、「何もしゃべらず同じ部屋にいて夫婦それぞれ別々のこと、夫がゲーム、妻がビデオ鑑賞など、を行っていて気まずくないとき」「人には言えないような他人の悪口を（相手にどう思われるか気にしないで）愚痴っぽく話せるとき」などが含まれる。コミュニケーションとしての性交渉の側面よりもその他の要因が日本人夫婦間の親密性に寄与していることが見てとれる。

出生は男女の避妊を伴わない性交渉によって（通常は）発生するものである。生殖の成功は諸々の生物学的要因に規定されるが、同時に、性交渉の頻度はその行為に意味づけをしている「文化的脈絡」によっても規定されていると言える。よって、少子化対策としては、日本における夫婦関係や男女の親密性のあり方を踏まえた上で、文化的「好み」を考慮した取り組みが求められるだろう。特に、妊孕力の推計が想定する「定期的」で「(月経サイクルのうち) ランダム」に発生する夫婦間の性交渉が成り立っておらず、またその文化的土壌がないとするならば、結婚年齢の高齢化とも相まって「自然」な性交渉の発生と結果としての出生を期待するのは難しいであろうことが示唆される。

<参考文献>

- Bongaarts, J. & Potter, R. (1983). *Fertility, biology, and behavior*. San Diego: Academic Press.
- Lebra, T. (1984). *Japanese women*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Moriki, Y. (2017). "Intimacy and physical happiness in Japan," *Happiness and the good life in Japan*. Manzenreiter, W. & B. Holthus (eds.), London: Routledge.
- Moriki, Y., Hayashi, K. & Matsukura, R. (2014). *Low Fertility and Reproductive Health in East Asia*. Ogawa, N. & I. Shah (eds.), (International Studies in Population Vol. 11). Dordrecht: Springer, pp.161-185.
- 日本家族計画協会 (2015) 「第7回男女の生活と意識に関する調査」 (www.jfpa.or.jp/paper/main/000047.html).
- Tahhan, D. (2007). "Two plus one still equals two: Inclusion and exclusion in the Japanese family," *Japanstudien* (19):151-168.
- Wood, J. (1994). *Dynamics of human reproduction*. New York: Aldine de Gruyter.